

【 10 月の気象 】

天気は周期的に変わり、移動性高気圧に覆われて秋晴れになることが多い月です。朝夕の肌寒さを感じる季節となり、日々の気温も寒暖を繰り返しながら下降し、月の初めと月末では平均気温が 5 度以上も下降します。ただし、近年では 10 月になっても最高気温が 30 度を超える日も珍しくありません。昨年（2025 年）は県内アメダスのいずれかの地点で 30 度を超えた日が 16 日ありました。四国地方の 3 か月予報では、10 月の平均気温は「高い」、降水量は「ほぼ平年並」の見込みです。

また、台風の時期は終わっていません。9 月に比べると台風の発生数、接近数ともに少なくなります。四国地方への台風の接近数の平年値（1991 年～2020 年の平均値）は 0.4 個となっており、数年に一度は四国地方へ接近しています。秋雨前線の影響が加わり大雨となることも考えられます。令和元年

（2019 年）の台風第 18 号は東シナ海から日本海に進み、南予では 1 時間に 50mm を超える短時間強雨となり警戒レベル 4 相当の土砂災害警戒情報が発表となった市町がありました。

【 気象用語 】 大気と海洋の相互作用

2021 年にノーベル物理学賞を受賞した愛媛県出身の眞鍋淑郎博士は、地球の気候と、それに対する人間の影響に関する研究が評価されました。同博士は、1960 年代から地球の気候の物理モデルの開発を先導し、大気中の二酸化炭素の増加が地球の温度上昇につながることを実証しました。同博士の開発した「大気海洋結合モデル」は、世界各国の気象研究機関等で、開発・使用されている気候モデルの原型となりました。

気象庁でも、日本の気候に大きな影響を与えるエルニーニョ・ラニーニャ現象の予測や、季節予報などに、大気と海洋の間の相互作用を考慮して一体的に予報する「大気海洋結合モデル」を導入しています（図 1）。

地球表面の 7 割を占める海洋は、大気に比べて熱容量が大きいので大量の熱を蓄積しており、大気との熱のやり取りを通して様々な時間・空間スケールで、気候に大きな影響を与えます。温室効果ガスの増加に伴う熱エネルギーは、およそ 90% が海洋に蓄えられた（海が吸収している）といわれており、海洋は熱と二酸化炭素の貯蔵庫となっています。地球温暖化の進行を緩和する働きがある一方で、結果として海面水温の上昇や海洋環境の変化が生じています。日本近海における 2025 年までの海域平均海面水温（年平均）の上昇率は、100 年あたり +1.36℃ の割合（図 2）で、この上昇率は世界全体や北太平洋全体よりも大きく、世界平均の 2 倍以上です。また、日本の気温の上昇率（100 年あたり +1.44℃）と同程度の値となっています。日本近海の海面水温には十年規模の変動がみられ、全海域平均水温では近年は 2000 年ごろに極大、2010 年ごろに極小となった後、上昇しています。

日本近海の海面水温の上昇は、日本が高温となる要因の一つとなるだけでなく、大気中の水蒸気量が増加することにつながります。水蒸気量の増加は、極端な降水の発生頻度や、その強度の増加につながります。最近発生した令和 8 年 8 月千葉豪雨や愛知県（レベル 5 氾濫特別警報の発表）などの大雨は、これらを一つの要因として発生したことが考えられています。

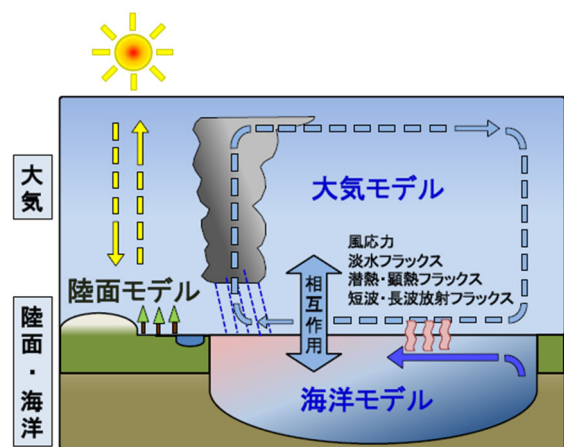


図 1 大気と海洋の間の相互作用を考慮して一体的に予報する大気海洋結合モデル概念図

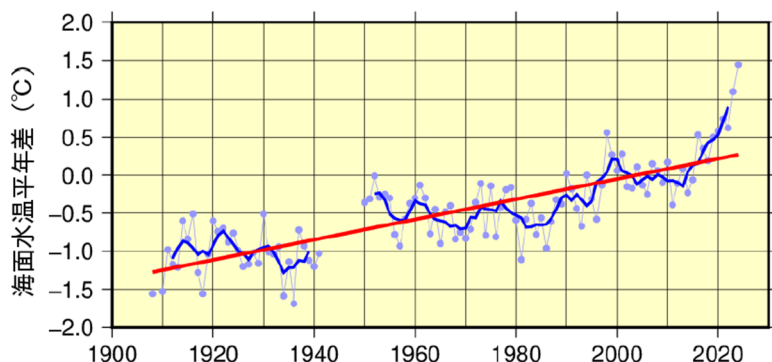


図 2 日本近海の全海域平均海面水温（年平均）の年差の推移（薄い青丸は各年の年差、濃い青線は 5 年移動平均値、赤の直線は長期変化傾向）